左）巨大恐竜ティラノサウルス
右）ヤング・アロサウルス2号

恐竜が人間を襲う!?
イベント会場

Interview
ただ今ブレイク中

圧倒的な存在感、「動く恐竜」を制作

(有)ON-ART　代表　金丸賀也（かずや）さん

この5月、日本テレビ「ぶらり途中下車の旅」で初めてこの恐竜を見た時、その大きさ、リアルな姿と動きに衝撃を受けた。恐竜が動き回り、巨大な口を開け閉めしていた。「何だこれは、恐竜型ロボット？　どうやって動かしているの？」そしてさらに驚いたことは、その番組で恐竜の制作者として紹介された人が10年前に取材した、アーティストの金丸賀也さん（50）であったことーだった。

恐竜制作の現場は所沢市糀谷にある。以前機械工場であった場所を5年前から借り受けている。入り口ではバルーンの恐竜にスタッフの若い男性がエアブラシで彩色中。バルーンの恐竜は動かないタイプだが、その奥には制作中の恐竜が数体。そして一番奥にはテレビで見た、あの「ヤングアロサウルス」が。その隣には7月に完成した「ティラノサウルス」が並んでいる。間近で見るとその迫力に圧倒される。横に立つ金丸さんが小さく見える。何せヤングアロサウルスは5・5m、ティラノサウルスは全長8mの実物大である。体育館もの広さの制作現場は子どもへ、そして大人へと夢を紡ぐ、さながら恐竜夢工場のようだ。

チャレンジャー
金丸賀也さん
（有）ON-ART
☎ 04-2907-7571
http://www.on-art.jp

病気がきっかけでビジネスにシフト

金丸さんは東京芸術大学のデザイン科出身。これまで博物館や美術館のさまざまな造形物、デパートのショーウインドウの、それは見事な背景画などを制作してきた。一方で自分がやりたいアート作品も手がけた。見る人を「あっ」と驚かせ、その後「考えさせる」ロボットの制作。家族で食事中に、父親がチャブ台をひっくり返す「チャブロボ」、古自転車でつくった、戦えない戦車「戦車メンタルジャニー」、人間と一緒に散歩する歩行ロボットなど、およそ凡人の発想では生み出せない、面白い創造物ばかり。12年前、テレビ東京の番組「たけしの誰でもピカソ」のアートバトルに出演、5週勝ち抜きのグランドチャンピオンに輝き、ニューヨークで個展開催という、ご褒美をもらった。けれども、その直前にそれまでの無理がたたったせいか、急病で倒れ、しかもそれは生死の境をさまようような重病だった。

ニューヨークでの個展は妻の明美さんが代理として行き、実現したが、この病気が金丸さんに転機を与えた。

「経済的にもある程度安定させないとすべてうまくいかなくなることに気づかされた。病気後は働くにしてもどのくらい働けるかも不安でしたので、今がんばらなければと思いました」

テレビやイベントでフィーバー

45歳で有限会社「ON-ART」を立ち上げた。「会社をつくれば何とかなると思っていましたが、現実は悲惨な状況でしたね。下請けの下請けには正当なお金は払われない、大企業優位なんです。ものづくりの現場はどこも焼け野原ですよ」

卓越した造形力と技術を持っていても、それが金銭的には正当に評価されない。それが日本の悲しい現実なのだ。しかし金丸さんは起死回生のベンチャーに挑戦する。それが「恐竜」だった。しかも「これだ」と直感したというのが金丸さんらしい。

「恐竜はノンキャラクターで、想像

上の動物なので、自由に造れます。研究が進むほど人気がでますし、それにドラゴンは吉祥の印で縁起のいい動物でしょう」

それまで蓄積した技術のすべてを恐竜制作に打ち込んだ。もともとリアルなものをつくるのは得意、最初から動く恐竜をつくるつもりだった。

材料はカーボンファイバー、ここでも他が追随できないエアブラシの技法が活かされている。社員2名、ほかスタッフ5名で4年前、ヤングアロサウルス1号機を6ヶ月で完成させた。1年半くらいは世間から何のオファーもなかったが、新聞社などに売り込むことで、徐々に知られるようになった。そうして今年はこれまでNHKの「熱中スタジアム」など十数本のテレビ番組に出演。北海道から九州まで各地のイベントにもひっぱりだこだ。「今年やっと、恐竜をやって良かった」と思う。

子どもたちに恐竜を体験させたい

くるくると動き、鋭い歯で人の頭を噛むリアルな動きの種明かしは、中にプロのアクターが入っているのだった。内部に頭や尾を動かすメカとバッテリーが搭載され、恐竜になりきった（？）アクターが操作している。よく「ロボットですか？」と尋ねられるが、これをロボットで作るとなると、億単位の費用がかかるだろう。

ショッピングモールでのイベントには2日間で1万人もの観客が押し寄せる。恐竜に出会った瞬間の子どもたちの「キャー」という叫び声を目をつぶって聞くと「熱狂的な音楽を聴くような新鮮さを感じます。この世のものではないような、今までやったことがない体験を子どもたちにさせたい。ガ～ンと土足で頭に入ってくるもの。それが子どもの一生を決めるきっかけにもなりえるのではないでしょうか」

決して人が真似できないことに挑戦するのが金丸さんの真骨頂。クオリティを保つには資金がかかる。いくら稼いでも黒字にならないのが悩みだが、この恐竜に注目した大企業と契約の話もある。下請けからの脱却、「危機感とヤル気」がビジネスチャンスを生む。

これまで制作したのは4種5頭の動く恐竜だが、もっと種類も大きさも違う恐竜を増やそうと準備中。さらにデッカイことを企てていそうだ。金丸さんの動きにこれからもハラハラドキドキ目が離せない。

（東久留米市在住）